

## 当協会における胃がん検診の現状と問題点

○ 幡野勝久、白岩武、有松忍、外山慎  
亀山欣之、油井克広、鈴木仁

公益財団法人福島県保健衛生協会

### 【はじめに】

平成19年から5年が経過した平成24年に新たながん対策基本計画が策定された。その中で、75歳未満のがんによる死亡率を20%減らすことや、がん検診の受診率を5年以内に50%にまで達成することなどの目標値が継続して設定された。

実施主体である市町村や事業所等から委託を受け、がん検診を実施している当協会は、上記基本計画目標の達成を目指して、市町村等と連携を図りながら進めて行くが、集団検診における胃がん検診が、今後もさらに死亡率減少に有効性を発揮できるよう自助努力す

る必要がある。

そこで今回、当協会が行っている胃がん検診の現状を再検討し、私たちが抱えている問題と今後の対策を考えたので報告する。

### 【問題点と対策】

1. 年次推移を見ると受診者数は、この10年間で大幅に減少しており、これを増やすためには、改めて啓蒙活動の強化を図る等の対策が必要である。

2. 新X線撮影法の導入後、高齢者にかかる負担が大きくなり、撮影に要する時間も増えた。これらを考慮に入れ、高齢者に無理がかからず、撮影時間も短縮できる撮影法の導入が望まれる。

3. 近年、大学等で胃X線診断学を学んだり、研修したりする機会が非常に少なくなったため、胃X線読影医不足が深刻な問題となりつつある。これらに対応するために、遠隔読影体制の確立は必須の課題である。

4. 胃 X 線撮影装置は、フィルムからデジタル装置へと変わってきた。それに伴い装置の更新費用も含めた維持管理費の上昇が重要な問題になり、中長期的計画の下での予算化が必要になってきた。

【まとめ】車検診における胃がん検診が、今後もその有効性を維持し、社会から必要視され続けるよう、技師一人一人が技術向上を目指して努力し、それが受診者数の増加と死亡率減少に繋がるようになることが重要であると考えらる。